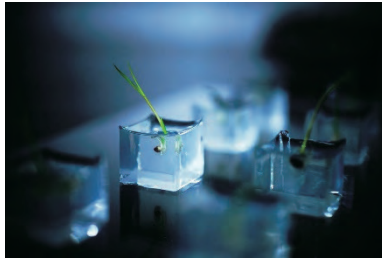


大山龍『身土不二』プロジェクト (2020)



身体は食物でつくられ、食物は土地からつくられる。身体と土は切っても切り離せない。このプロジェクトは、米をキーワードとして、東北、沖縄、韓国や台湾など各地を巡りながら食や土を巡って思索を展開してきた。

今回提供した写真は、2020年末のコロナ禍の中、台北で実際に行われた国際芸術祭でのパフォーマンスの様子の一部だ。まず台北に到着した私は、福島や沖

縄産の玄米を、隔離ホテル内で寒天の上で発芽させ、稲の実生を成長させた（表紙裏面）。同時に、台湾や沖縄に自生するガジュマルの葉を、米を炊いて作った米糊で象った「Rice Plants」を作製した（表紙写真）。これらは作品として視覚的に見せるだけでなく、実際に夕食として芸術祭の会場（LabKillLab, LKL）で振る舞われたものである。LKLは、世界的に評価の高いアーティスト、Shu Lea Cheangのキュレーションによって実現した実験的なイベントだ（<https://clab.org.tw/en/project/lab-kill-lab/>）。5つのセクションに分かれて開催され、100名以上のアーティスト、ハッカー、研究者、シャーマンたちが関わった。その内容は政治的なものから、科学的、学術的、神秘的、アイロニカルなものまで多岐に及び、プロジェクト自体が有機的な一つの生命体、もしくは矛盾を取り込みつつ何も生み出さないカオスのようなものだった。世界的なコロナ禍の環境下において、この規模と内容のプロジェクトが開催されたことは驚きだった。

2008年以来、毎年東北地方に滞在するようになり、大震災後の2012年に再度被災地を訪ねた。その際、私は僅かな感覚の「ギャップ、違和感」を覚えた。それは、大量の被災現場の画像や情報をもとに想像していた震災のイメージが、実際の状況と遥かにかけ離れたことに由来していた。無論、壊滅的な被害がこの地域にもたらした甚大な影響に変わりはない。いっぽうで、原発近く福島の青々とした稲苗のある水田の意味することは何か。この米が、最終的に食用となったのか汚染された廃棄物となったかは分からない。多くの農民にとって、土地は深い意味を持っており、単なる所有物や財産ではない。何世代にもわたって受け継がれた家族の一部であり、土地を失うことが意味することは、彼らの精神を奪うようなものかもしれない。

言うまでもなく、「米」はアジアの主食であるだけでなく、それ以上の意味がある。時間を越えて受け継がれてきた、伝統、道徳、習慣、信仰の象徴でもある。成長する稲を培地ごと食すことは、根源的な食に対して無意識に当たり前、習慣とすり替わっていることに疑問を投げかけようとしている。

大山龍 (Ryu Oyama)

アーティスト。1976年生まれ。日本で薬学と彫刻を学んだ後、ドイツへ渡り現代美術の分野で活動、4年前より沖縄へ移住し、沖縄を拠点に台湾、韓国、フィンランド、インドネシアなど世界各地で特異なアートプロジェクトを展開してきた。薬学部出身の希少なアーティストとして、薬学で培った知識をベースに、興味とともに各地でフィールドワークし続ける。

<https://www.ryuoyama.com/>